

研究主題 国語科における「読むこと」の効果的な指導法の研究**～目的意識をもち、学びを生かす説明的文章の授業づくりを通して～**

要約：今求められている国語力を論理的思考力・表現力ととらえ、確かな読み解く力を培う説明的文章の授業構想をめざした。そこで、『目的意識をもち、学びを生かす』単元構成が必要であると考え、学びの必要感を生む単元のゴールを設定し、学習のめあてを明確にしながら、学びを実践的に生かす授業を実践した。その結果、読みの学習意欲を喚起し、学びを生かす過程で論理的思考力・表現力・言語能力を培うことができ、効果的な学習活動となった。また、学んだことを観点とし学びを意識づける評価を繰り返すことで、読みの理解を深め、学習意欲を高めることができた。さらに、授業の中で自学を生かしながら読み解いていくことで、自学法を読みの方法知としてメタ認知させ、学習意欲や自学力を高めることができたと分かった。

キーワード：論理的思考力・表現力の育成、目的意識、学びを生かす、確かな読みの力の系統性、螺旋的・反復的な学習、「書くこと」との関連、自学法

I. 主題・副題の設定理由**1. 今求められている国語力**

現行小学校学習指導要領は、児童生徒の主体的な学びを重視しながら、論理的思考力や問題解決能力等の「生きる力」の育成を図ることを基本的なねらいとしている。しかし、この改訂における学習内容の削減や授業時数の減少による「学力低下」から、平成 15 年の中央教育審議会答申で「確かな学力」育成のための取り組みの充実が打ち出された。

また、同年実施の PISA 調査の結果、記述式の問題が苦手なことが分かり、考える力を中核として読む力と書く力を総合的に高めていくための『読解力向上プログラム』がまとめられ、思考力や表現力が強く求められることとなった。さらに、昨年度実施された本県の基礎学力調査結果の分析・考察では、論理的思考力を高めるための指導の工夫が求められている。

これらのことから、今求められている国語力を論理的思考力・表現力ととらえ、その力を育成する説明的文章の効果的な指導法について研究しようと考えた。

2. これまでの自分の実践における問題点

- ①説明的文章を読み解く力を、系統的に積み上げていく学習にはなっていなかった。
- ②児童にとって、読む目的意識が弱かった。
- ③読み解く力を、自ら生かす論理的思考力や表現力にまで高めていなかった。

この 3 つの問題点を改善するため、本研究において、説明的文章を読み解く力を系統的に明らかにし、児童が目的意識をもって、学んだ力を自ら生かすことができる授業構想をめざしていきたいと考えた。

II. 研究の目的

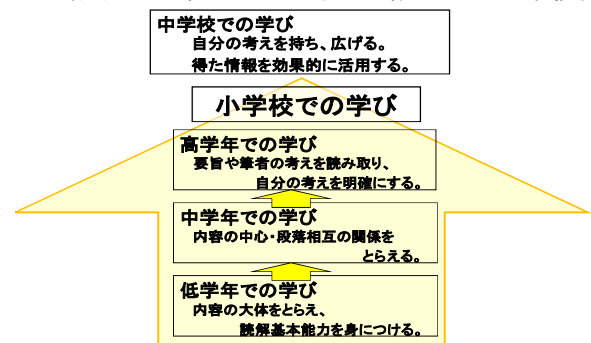
本研究は、目的意識をもち、学びを生かす説明的文章学習の授業づくりを通して、国語科における「読むこと」の効果的な指導法について探ることを目的とするものである。

III. 研究の方法

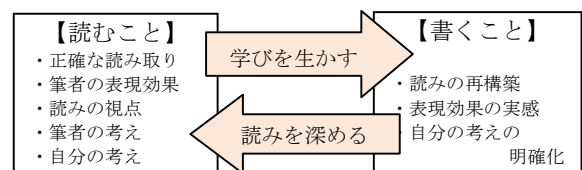
1. 説明的文章を「読むこと」について理解を深める。
2. 説明的文章において目的意識をもち、学びを生かすことができる単元構成について探る。
3. 実践授業を行い、「読むこと」の効果的な指導法であったか、成果と課題を考察する。

IV. 研究の内容**1. 説明的文章を「読むこと」について****(1) 説明的文章を「読むこと」の意義（目的）**

- ①学習者の興味・関心・意欲を高める。
- ②内容の理解を深める。
- ③文章構成及び叙述法に関する知識を獲得する。
- ④学習者の認識力・思考力を育成する。
- ⑤論理的な表現力を育成する。
- ⑥論理的な表現を支える言語能力を育成する。

(2) 説明的文章における確かな読みの力の系統性**2. 説明的文章の単元構成について****(1) 単元構成において**

本研究では、教材の内容を読み解くことを「内容的理解」、論理的表現について学ぶことを「形式的理解」と定義づけた。論理的思考力を育成するためには、この 2 つの理解が絡み合う単元構成が必要であり、「書くこと」と関連づけることが重要だと考える。

(2) 単元構成における「書くこと」の位置づけ

学びを自分の表現活動に生かすことで、読みを再構築したり表現効果を実感したりして、読みを深めることができると様々な研究者が述べている。しかし、2つの活動のねらいの一体化や学びの密接な連携が必要だとも述べられている。

(3) 説明的文章学習に対する意識調査

公立A小学校での意識調査の結果、高学年では内容を理解できないことから、国語の苦手意識が高まることが分かった。そこで、その原因と課題を考察した。

《原因》 高学年になると、

- テーマが身近なものから社会問題へと広がり、量的・内容的に題材の難易度が増す。
- 指導内容や求められる力が高度になる。

自分のものとして考えたり既習の力を生かしたりできない児童にとっては、これらに対応して読み解くことができず、苦手意識が高まっていくと考える。

《課題》

- 目的意識をもつことができる課題設定や単元構成の工夫。
- 学びを生かし、確かな読みの力を積み上げる。

このことから、本研究を公立A小学校で取り組み、児童の意識を変容していきたいと考えた。

3. 実践授業

《実践授業Ⅰ（第3学年）》

【単元名】 説明的文章で伝える工夫を読み取ろう。

【目標】 ～「ありの行列」～

- ・論の展開に目を向け、分かりやすく伝えるための方法について考えようとする。（関心・意欲・態度）
- ・中心文や段落相互の関係について考え、文章を正しく読み取ることができる。（読むこと）
- ・論を展開するための言語を理解する。（言語事項）

《実践授業Ⅱ（第5学年）》

【単元名】 目的に応じた伝え方を考えよう。

～「ニュース番組作りの現場から」「工夫して発信しよう」～

【目標】

- ・伝達方法について興味を深め、情報活用の視野を広めようとする。（関心・意欲・態度）
- ・必要な情報を得るための効果的な読み方をしながら、要旨を読み解くことができる。（読むこと）
- ・文章全体の組み立ての効果を考え、書く必要のある事柄を整理しながら書くことができる。（書くこと）
- ・的確に伝える構成や言語について理解する。（言語事項）

めざす児童の姿と学習の視点

視点1：学びの必要感を生む単元のゴールとめあての明確化

【めざす姿A：めあてをつかみ課題を解決する。】

視点2：学びを生かす場の設定

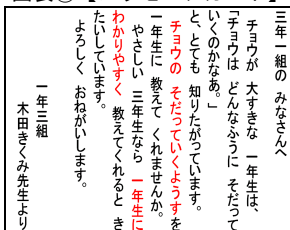
【めざす姿B：学びを自分の表現活動に生かす。】

視点3：評価活動の工夫（実践Ⅰ）

【めざす姿C：読みを深め、学習意欲を高める。】

視点1：学びの必要感を生む単元のゴールとめあての明確化

図表①【メッセージカード】



図表②【学校紹介番組】



実践Ⅰでは図表①のメッセージカードを読み、1年生にチョウの説明文を書くことを最終ゴールに設定した。相手意識を1年生とし、説明文を書くゴールをめざすことで、「分かりやすい説明文の述べ方」

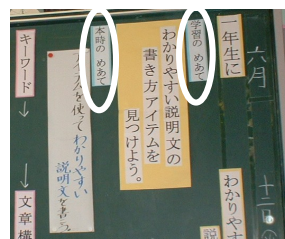
を読み解く学びの目的意識をもつことができた。

実践Ⅱでは、単元のゴールを学校紹介の番組作りに設定した（図表②）。3学期にテレビ放映する『NHK放送体験クラブ』に参加することが学習の必要感を高め、取材のプロである筆者の文章から番組作りに必要な情報を読み解く強い目的意識となった。

学習のめあてを明確にする手立てとしては、図表③のように、毎時間学習課題を確認し、黒板の定位位置に板書した。単元のゴールを常に意識化することで、児童は毎時間のめあてを単元のゴールに向かうステップとして位置づけながら学んでいた。

しかし、実践Ⅰでは、書く活動に意識が向いてしまい、本来の読みのねらいが薄れた活動もあったことから、書く活動との関連性が課題となった。

図表③【意識づける板書】



視点2：学びを生かす場の設定

《実践Ⅰ》学んだ述べ方で、説明文を書く。

実践Ⅰでは、説明文を書く場を設けることで、「学んだ述べ方を生かす」児童の姿をめざした。

児童は、自分の表現活動に生かそうと、述べ方を読み解く必要感に迫られ、

意欲的に読み解いていった。読み解いた筆者の表現の工夫は、図表④のように【説明文アイテム】と位置づけ、教室掲示することで意識化を図った。

そして、表現活動でこの学びを生かしたところ、学習後だけでなく次単元でも、学習前にはほとんど使用できなかった説明文アイテムを用いて表現できた。このように、効果的な言語を用いて論理的に表現できたことは、児童の大きな自信となった。

さらに、書いたチョウの説明文を1年生に送り、お礼のカードを一人一人もらったことで、児童は本単元での学びの価値や達成感を高めていた。

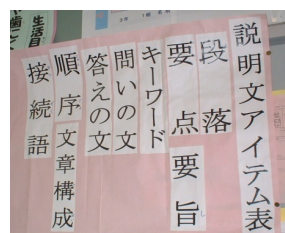
《実践Ⅱ》読み解いた情報をもとに、放送番組を作る。

実践Ⅱでは、番組作りの場を設けることで、「学びを発信活動に生かす」児童の姿をめざした。実践Ⅰで、「書く活動との関連性」が課題となったことから、本実践では、学びを生かす場を構成メモ作りに焦点化し、筆者が述べる「分かりやすい言葉を選び」「結論を初めに述べ」「一文を短くする」表現の工夫の理解を深めることにした。

まず、4人一組で番組作りすることとし、各自図表⑤のような構成メモを書いた。児童は、筆者が述べる表現の工夫を自ら用いて書くことで、論理的な表現方法や言語について実感した。

次に、図表⑥のように、4人の構成メモを1枚のワークシートにして渡し、お互いのメモを読み合い、表現を比較できるようにした。学んだ述べ方を観点にして、グループのテーマや願いを伝えるにはどの表現がよいか評価し合うことで、目的に応じた伝え方について理解を深めていった。

図表④【意識づける掲示】



そして、4人のよさを盛り込んで図表⑦のようなグループの構成メモを完成させたことは、この後の発信活動の大きな意欲となった。

さらに、交流会で友だ

ちの相互評価に加え、担任からの評価を得ることで、大きな達成感を感じ、本単元の学びの価値を高めていた。

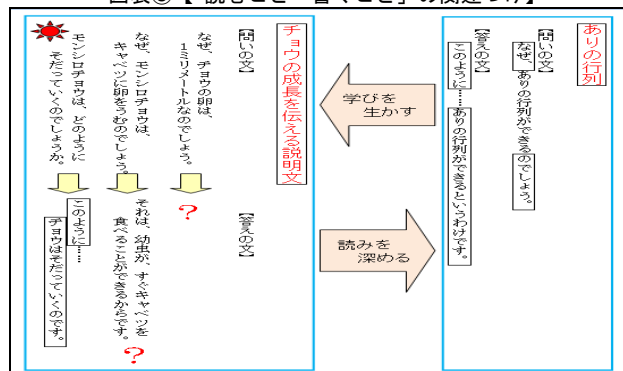
このように、児童は、学んだ述べ方の工夫を実際に表現活動に生かすことで、学びを実感し、学びが自分の活動に役立つことに気づいていった。

《生かす場で読みを深める》

反面学びを生かすことが難しく、立ち止まる場面もあった。

例えば、実践Ⅰでは、教材文の文末表現を真似て問いの文を作った。児童は、様々な問いの文を作ったが、「チョウはこんなに成長する」という結論につながらない文もあった。そこで、相互評価の場をもち、教材文の「問いと答え」が呼応している関係から、自分たちの「問いと答え」のつながりについて考えた。そして、2つの文の整合性に気づき、目的に応じた問いの文に推敲していった。(図表8参照)。

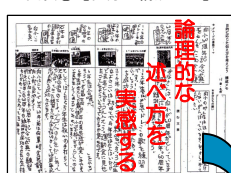
図表⑧【「読むこと・書くこと」の関連づけ】



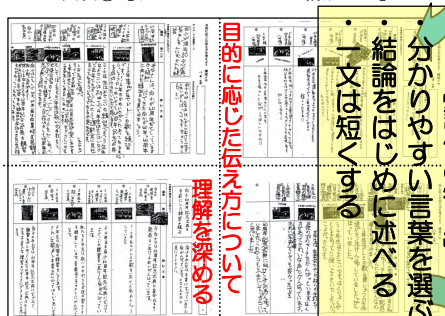
実践Ⅱでは、学んだ述べ方を用いて作った構成メモをもとに、交流会で発信した。しかし、相互評価において、どのグループも自分たちのテーマや願いが聞き手には伝わっていないことが分かった。児童は、評価の観点をもとに、自分たちの構成メモを見直した。そして、自分たちの願いを伝えるためには、「結論を初めに述べる」ことが重要な工夫であることや、本単元における「分かりやすい言葉」とは「主張を的確に述べる言葉」であり、言葉を吟味して使うことが必要であることに気づいていったのである。

このように、児童は、表現活動で躓くたびに、読みにもどり、学んだことを評価基準にしながら、目的に応じた伝え方について考えていった。

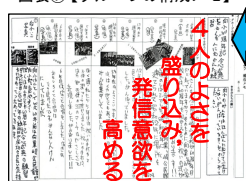
図表⑤【自分の構成メモ】



図表⑥【グループメンバーの構成メモ】



図表⑦【グループの構成メモ】



そして、論理的に述べようと試行錯誤しながら表現する過程で、表現力や言語能力を磨いていった。

これらのことから、学んだことを表現活動に生かし、さらにそれを観点としながら繰り返し評価したり、読みにもどり吟味したりしていく中で、児童は読みの理解を深めていったと考える。

実践Ⅰの視点3：評価活動の工夫

実践Ⅰの視点3では、評価の工夫を試みることで、「読みを深め、意欲を高める」児童の姿をめざした。

①学んだことを観点にした評価

チョウという共通テーマのもと、同じ文章構成で説明文を書くことで、学んだ【説明文アイテム】を観点に焦点化して相互評価できるようにした。児童は、学んだアイテム用語を評価語彙に用いながら、述べ方の工夫について理解を深めていった。

②自分の力の伸びを実感できる評価

表現活動前後に、図表⑨のチェックカードを用いてアイテム使用度を数値化し比較した。児童は、学習前の×を○にし、アイテムの数値を増やしたことで自分の力の伸びを実感することができた。

図表⑨【チェックカード】

指示語	接続語	答えの文 せいの文	内容(要) 点 さなぎ よう虫 たまご	問の文	段落	題名	文章構成	アイテム	学習前	学習後
06X	/	273	X	X	X	X	X	学習前	学習後	
260	/	5695	0	8	0	0	0	学習前	学習後	

③学びを実感し、意識づける評価

毎時間終末に自己評価する場を設定した。自己の学びや次時の課題について自分の言葉で振り返ることが、学びを意識づけ、次の学習意欲を引き出す上で効果的であった。

しかし、1度の体験だけでは自信や意欲に結びつかない児童もいることから、既習の力が螺旋的・反復的に働いていく学習活動の展開が今後の課題となった。

4. 自己学習法

実践授業Ⅰで「螺旋的・反復的な学習活動」が課題となったが、年間数回しかない説明的文章単元だけでこれを展開することは難しいことから、自己学習(以下「自学」とする)能力を高めていくことが必要だと考えた。日々の読書生活の中で、自らその力を螺旋的・反復的に使って読むことができれば、確かな力になっていくと考えたからである。

そこで、本研究では『自学』を「単元の準備となる学習」と位置づけ、公立A小学校での意識調査をもとに自学法について考えた。そして、実践授業Ⅱに取り入れ、「自学を授業の中で生かす」児童の姿をめざし、考察することにした。

(1) 公立A小学校の自学意識調査

調査の結果から、次のように考察した。

- ①半数近くの児童が、「うまくできない」と困っていることから、自己解決ができるような『自学の手引き』を作ることが必要である。
- ②論の展開を読み解くための自学法を用いる児童が少ないことから、読み解くための自学という『目的意識をもつ』ことが大切である。

(2)『自学の手引き』について

自学の手引き

(概要)

★ステップ1 《学習のベースを作ろう》

1. 読めない漢字を調べる。
2. 分からない意味の言葉を調べる。
3. 音読練習する。

★ステップ2 《はじめの出会いを大切にしよう》

1. 題名について考える。
2. 分かったことや思ったことを書く。
3. みんなと考えたい課題を見つける。

★ステップ3 《論の展開を理解し、筆者の主張をとらえよう》

1. 形式段落に番号をつける。
2. 問いの文を見つける。
3. 段落の要点をとらえる。
4. 文章構成をとらえる。
5. 文章の要旨をとらえる。
6. 文章を要約する。

★ステップ4 《学びを広げよう》

1. 筆者の考えに対して、自分の考えをまとめる。
2. 筆者の述べ方の特徴やよさを見つける。

4つのステップに分けて示すことで、必要に応じた自学法を選択できるようにした。また、実際の『手引き』では、選択肢一つ一つについて具体的な解決方法を記載し、自己解決の手立てとした。

さらに、児童の実態に応じて、自学法を理解・練習する「事前授業」や自学法を再確認する「事後授業」も必要であると考ええる。

(3) 目的意識のある自学について

【自学フィードバック法】

- ①単元のねらいを共通理解し、自学する目的意識をもつ。
- ②自ら選択した自学が効果的であったかフィードバックする場をもつことで、自学法を読み解き方としてメタ認知する。
- ③自学をもとに読み解く学習活動を展開し、学習の中で自学のよさを実感する。

このように目的に応じた自学ができたかフィードバックすることで、目的意識のある自学になると考えた。また、授業で生かし、自学のよさを実感することで、自学意欲や自学力を高めることができると考えた。

5. 自学法を取り入れた授業の考察

実践Ⅱの視点3：自学を生かす学び

実践Ⅱの視点3では、自学を学びに生かすことで「自ら読み解く」児童の姿をめざした。本実践では、児童の自学力が弱いため、事前・事後授業も取り入れた。

(1) 事前授業（題材：第3学年教材『ありの行列』）

『自学の手引き』を用いて自学法について理解・練習することで、既習事項が自学方法になることを理解できた。

(2) 本単元

本単元で自学法の選択肢が増えたことから、児童が、事前授業で自学法を理解したことが実証された。

また、自学後にフィードバックすることで、本単元では「要点をとらえる」ことが目的に合った自学であることに気づき、次時の自学で各自要点をとらえた。実際に要点をとらえると、自分たちに必要な情報を得られたことから、目的に応じて自学をすることが効果的であることを実感し、読み解き方としてメタ認知することもできた。

そして、授業の中で自学を生かして学ぶことで、友だちの考えや内容をより理解できたと実感し、自学の有用性に気づいていた。

(3) 事後授業（題材：第4学年教材『夜に鳴くセミ』）

事後授業の自学が学習の準備となる自学に変容したことから、目的に応じた自学を選択できるようになったことが実証された。また、論の展開を理解する自学に取り組む児童が増えたことから、高学年としての読み解く目的意識が芽生えてきたと考える。

そして、自己評価において、自学法を理解し、自己解決できたと実感している児童が増えたことから、本単元で自学を生かし学んだことは、自学法を理解し自学力を高める上で効果的であったと考える。

一方、「文章構成」をとらえる自学をする児童はいなかった。本実践でとらえる必要感を感じなかったからと推察する。しかし、次単元（第6学年）では必須の学習事項であることから、次単元を「文章構成をとらえる」学びに気づき、学習する単元と位置づけることができる。このことから、単元の特性と培う力を系統的に把握し、低中高2学年の中で確かな読みの力をつけていくことが大切であると考ええる。

さらに、本実践だけでは、まだ十分に自学力を高めていないことも明らかである。児童一人一人が自立した確かな読みの力を獲得するには、6年間かけて自学力を育成することが必要だと考える。

6. 実践授業における成果と課題

《成果》

- ①学びの必要感を生む単元のゴールを設定することは、単元を通じて必要な事項を読み解こうとする学習意欲を喚起する。
- ②「読むこと」と「書くこと」を関連づけた単元構成は、学びを表現活動に生かす過程で論理的思考力・表現力・言語能力を培っていく。
- ③学んだことを観点とし、表現したり評価したりすることで、読みの理解を深め、学びを意識づけることができる。
- ④授業の中で自学を生かしながら読み解いていくことは、自学法を読みする方法知としてメタ認知させ、自学意欲や自学力を高めていく。

《課題》

- ①単元の特性とつけたい力を系統的に把握し、低中高2学年の中で確かな力をつけていく。
- ②一人一人が自立した確かな読みの力を獲得するため、6年間かけて自学力を育成する。

7. 研究のまとめ

(1) 結論

- ①目的意識をもち学びを生かす単元構成は、学習意欲を強く喚起し、自分の表現活動に生かす過程で論理的思考力・表現力・言語能力を培う。
- ②学んだことを観点とし、学びを意識づける評価を繰り返すことで、読みの理解を深め、学習意欲を高めることができる。
- ③授業の中で自学を生かしながら読み解いていくことは、自学法を読みする方法知としてメタ認知させ、自学意欲や自学力を高めていく。

(2) 今後の課題

本研究でとらえた「確かな読みの力の系統性」をもとに、6年間かけて自立した確かな読みの力を培うことができるよう、研修の成果を学校全体に広め、実践していくようにする。